

世界的発見に至るまで

鳥屋城山でモササウルス類の化石が発見されたのは、平成18年（2006年）2月のことです。当時、京都大学大学院生であった御前明洋さん（北九州市立自然史・歴史博物館学芸員）が、化石の調査中に骨特有のスポンジ状の組織を持つ大型爬虫類の骨化石を発見しました。発見の連絡を受けた和歌山県立自然博物館が、京都大学と共同調査したところ、周辺部に骨化石がまとまって存在し、モササウルス類の化石であることが明らかになりました。本格的な発掘調査は、平成22年（2010年）12月から始まり、4カ月の期間を要しました。化石は、非常に硬い岩で覆われていましたが、骨化石の多くはもろくなっていたため、作業は難航しました。しかし、次から次へと骨の化石が間接でつながった状態で発見され、最終的には3m×1mの範囲において、大量のモササウルス化石が埋まっていることが確認されました。化石が密集して発見された地点の周辺1mの範囲についても調査が行われ、化石が存在していないことを確認した上で、全ての岩石が採取されました。

化石の表面を覆っている余分な石を取り除くクリーニング作業は、金屋中学校の教室を利用して実施され、平成23年（2011年）5月から始まりました。クリーニング作業の完成までには、約5年の歳月を要しましたが、全身の8割にも及ぶ骨格が発見され、7200万年前に生息していたその全体像がよみがえりました。

化石の調査研究は、小西卓哉さん（シンシナティ大学教育准教授）を中心に、和歌山県立自然博物館などの研究チームがクリーニング作業と併行して進め、令和5年（2023年）に最終的な研究成果と「メガプテリギウス・ワカヤマエンシス」という新種の学名を記した論文をイギリスの古生物学術雑誌に投稿し、新属新種であることが認定されました。



クリーニング作業



全身骨格化石

28ページへ続く